

歴史を語る建物たち

秋田編
(第5回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧池田氏庭園洋館（大仙市）



かつて池田家は、山形（酒田）の本間家、宮城（石巻）の齊藤家とともに、「東北三大地主」といわれた。いずれも最盛期には1,000町歩（約10km²）以上の土地を持ち、東北はおろか、全国的にも有数の大地主であった。その池田家の広大な庭園（12,700坪）に、洒落た2階建ての洋館が建っている。大正9年から11年にかけて建設された、秋田県最初の鉄筋コンクリート建築物である。

宮家のご来訪が洋館建設の契機に

明治期から戦後の農地改革に至るまでの池田家は、秋田県最大の大地主であると同時に、県内最多の納税額を誇っていた。それゆえ、12代・甚之助は秋田県選出の初代貴族院議員となり（当時の貴族院議員は高額納税者が選ばれることもあった）、明治22年の町村制施行で新たに高梨村が発足すると初代村長になった。その後、13代・文太郎、14代・文一郎と昭和18年まで3代にわたって村長を務めた。

池田家の歴代当主は、村長として地域の経済、社会の発展に尽力するだけでなく、「昔の記録を見ないと分

からない」（現16代当主・泰久氏）ほど多くの人をもてなす名士でもあった。その中で大正期には、宮家（閑院宮、梨本宮）のお姿もあった。

洋館の内装にはイタリア輸入の大理石、部屋には豪華なシャンデリア、日本に数例しかない金唐革紙の壁紙など、当時の最高資材と最新技術を取り入れた洋館



建築時の工事写真。石材から内装までこだわった建物は、着工から落成まで3年の歳月を要した。
写真提供：大仙市教育委員会

は、完成まで3年の歳月を要し、建設費は当初予算の2倍を超えた（現在の貨幣価値にして数億円ともいわれる）。

なお、大正11年に完成した洋館は、“迎賓館”としての役割を果たすと同時に、図書室を地元の青少年に開放して、地域教育の発展に貢献するという側面も持ち合わせていた。

国指定名勝の庭園に痛んだ建物では…

戦後の洋館は地元の集會などに使われていたが、昭和37年を最後に使用の記録がない。16代・泰久氏は、「2階には卓球台や遊具が置いてあり、集會がないときは私たち子どもの遊び場でした。まさか、全国的にも貴重な金唐革紙が壁紙に使われているなど全く知りませんでした」と、当時を振り返る。

長らく“時計が止まった”洋館の針が再び動き出したのは、平成16年に池田家の庭園が国の名勝に指定されたことによる。

その数年前に、古い資料から、庭園が“日本の近代造園の祖”といわれる長岡安平の作による可能性が高いと推測されたことから、当時、仙北町（旧高梨村、現大仙市）の町長であった伊藤稔氏（現・池田家顕彰会会長）らが中心となって、「庭というより藪だった」（伊藤氏）庭園を往時の姿に復旧するため、自生樹木処理などの整備と清掃作業が開始された。そして、学術的価値はもとより、県および学識経験者などの助言協力、そして地元の熱意により、秋田県の庭園として初の、国の名勝指定を受けた。

しかし、庭園が整備され、名勝指定を受け、一般公開されたことは、皮肉にも、長年の未使用で損傷が激しかった洋館を、白日の下にさらす結果となってしまった。「これではいけない…」。関係者の思いは一致していた。そして、平成18年8月、建設（3年）より長い、5年に及ぶ修復工事が始まった。

見事な修復工事に皇太子さまも驚嘆

修復は、建物の骨組み、外壁、内装（漆喰、シャンデリア、壁紙など）、屋根など多岐にわたり、工事には延べ約6,000人の職人、作業員が従事した。とりわけ困難だったのが、壁紙（金唐革紙）の復元であった。金唐革紙とは、金属箔を貼った手すき和紙に、文様を彫った版木棒を重ね凹凸をつけ、彩色して仕上げた最高級の壁紙である。

池田家洋館の2階で使用されている金唐革紙の版木棒は、偶然、東京の製紙工場で見つかり、「紙の博物館」（東京都北区王子）に収蔵されていた。また、当時のスペアロールが池田家に保管されていた。

そこで、版木棒の文様を修理し、1階の壁紙は池田家の蔵に未使用の壁紙があったことから、それを基に版木を彫り起こし、当初の工程に従って作成したものである。ちなみに、2階食堂の金唐革紙は、国会議事

堂のそれと同じ柄であるが、国会議事堂より1色多い。平成22年10月、総事業費2.8億円（国と市が1.4億円ずつ負担）をかけて見事に復元された洋館は、平成24年6月、秋田県を公式訪問された皇太子さまも感嘆され、「（金唐革紙の復元は）大変な作業でしょうね」、「良いものを見せていただけてありがとう」と言葉をかけられた。それを聞いた16代・泰久氏は、「これからも精進しなければならない」と、身の引き締まる思いだったという。

貴重な市の観光資源として再出発

洋館などを含めた池田家の庭園は、平成19年に大仙市に寄贈された（現在の正式名称は、旧池田氏庭園）。それについて筆者が何か言おうとするのを、16代・泰久氏は手で制し、「おっしゃりたいことは分かります。寄贈とはいえ、先祖代々の土地建物を手放したことに変わりはありません。ただ、池田家は代々、地域に貢献することを家訓としてきました。ですから、今後、庭園などが文化資源、観光資源として活用されれば、ご先祖さまも（寄贈を）許してくれると思います」と話してくれた。

現在、庭園（洋館は1階のみ）の一般公開は年3回（計20日程度）であるが、大仙市文化財保護課は、「将来的には公開期間を長くすることも検討しています。まだ寄贈いただいてから日が浅いので、これからもっとPRして、市の重要な観光スポットにしたいと考えています」と話す。

しかし、2階も含めた、年に数回だけの洋館特別公開（事前申し込み制）は今まで通り変えないという。洋館は往時のままに修復工事がなされたため、階段など、一度に大勢の方が訪れるのは構造上危険というのが理由だ。確かに、昔の洋館も、一度に1,000人を超すほどの大勢の客人が連日訪れたことは、おそらくなかっただろう。

“普通に使われていた”洋館を公開する。そこにむしろ、洋館を大切にしている関係者たちの強い思いが伝わってきた。（フィデア総合研究所主事研究員・山口泰史）



1階の玉突室。ビリヤードに興じるだけでなく、迎賓と社交、交流の場でもあった。当時の人々は何を語りながら球を突いていたのだろうか。（筆者撮影）